

日本の思想を取り扱うなかで

東京都立飛鳥高等学校 渡辺安則

1. はじめに

ここ数年、3年次の選択講座で日本の思想史だけを扱う授業を実施してきた。外国からの思想や文化の導入の経過や、日本国内でのさまざまな展開を、一応歴史的に順序立てて提示する形式を取ってきている。だが、2単位で1年間取り扱っても、基本的な部分の理解を形成するために多大の時間を要するのが実情である。数年間の事例からいくつかを取り上げて、日本の思想を取り扱うことの課題や困難を考えてみたい。

なお、筆者は授業中にしばしば雑談に脱線する常習犯である。また、ここで紹介する授業は選択講座で、毎年選択者が10名に満たない。そのためかなりの程度まで生徒たちとのやりとりが可能になっている。脱線の内容にしても、生徒からの反応次第で日本思想史どころか倫理そのものからさえ逸脱するようなケースも少なくない。このことをふまえておいて頂きたい。

2. 日本の思想を扱うときにどのような視点で捉えるか

(1) 内容の配列に関わること

日本の思想は、概略的に見ると「古代日本の原始的な思想」、「古代における仏教と儒教の導入」「中世（主に鎌倉時代）の仏教の発展」「江戸時代の儒教（儒学）をはじめとする諸学の発展」そして「18世紀以来の西洋思想・文化の導入と近代化」というように分けることができる。これを歴史を貫通する形で考えると、「仏教史」「儒教（儒学）史」そして「洋学史」というように区分してみることもできる。時代と、そこに特徴的に見られる思想状況を整理して取り扱う方法と、一つのテーマ（仏教や儒教のことになる）を歴史の流れに沿って追っていく扱い方をする方法があることになる。ここ数年、この両方の扱いを実施してきたが、どちらかといえば後者の扱いをするが多かった。それは、一つには思想の影響関係や論理的展開について、前者の扱い方では連続性を確認できない可能性があると考えたことが理由である。また、内容の取り上げ方にもよるが、すくなくとも教科書で見る限り仏教といえば古代と鎌倉、儒教といえば江戸時代、そして西洋思想といえば江戸幕末から明治以降、という具合に、結構きれいに分けられているということがある。だが、良く考えてみると、室町時代にも江戸時代にも、仏教のなかでさまざまな

思想が現れ、名僧知識も少なくない。一休の風狂ぶりや、良寛の生き方など、取り上げてみたい素材も数多い。また、儒教にしても、日本にもたらされたのはおおむね5世紀頃のことであり、江戸時代に突然登場したわけではない。西洋思想も戦国末期に入ってきている（キリスト教がその例であるし、宣教師によって伝えられた「南蛮文化」もその影響を考えてみたい素材である）のだから、明治に全部が入ってきたと考えるのも適切かどうか問題がある。このように考えて、さまざまにくくり方を変えて授業を構成してみた。

（２）歴史についての知識＝日本史の授業との関連について

筆者の勤務校では、日本史は2年次からの選択必修修になっている。一部の生徒は地理を選択するために、日本史の授業を受講していない場合がある。選択科目の設定によっては同様のケースがあるのではないかと思うが、この件にふれるのは思想が歴史と何の関連もなく学習された場合の問題点が考えられるからである。

日本の思想は、いや、日本に限らずどの国の思想でも、それが生まれた時代や社会を何らかの形で反映している。日本では外国から導入した思想が多いとはいっても、それらが導入された時代の状況はどうだったか、導入されたときに社会がどうなっていて、思想がどのようなインパクトを日本に与えたか、など、時代状況を考えることなく理解することが軽々にできるというものではないだろう。そうすると、やはり日本史の基本的な事項について理解が形成されているところで、その知識を援用しながら授業を進めることも重要なポイントになるはずである。このような考えにたって、歴史についてキーになると思われる事項をクイズ風の質問その他の形で確認しながら授業を進めるようにしてきた。このやり方について、ごく最近のことだが日本史担当の同僚と、文化史の面で扱いきれない部分に展開できればそれを期待するとか、内容に関して「こんなとらえ方もあったか」というような話をしたことがある。科目の枠で分断するのではなく、協力できるものについていわば「クロスオーバー」できることがあれば試してみる価値はあると思う。また筆者自身の授業を見に来た同僚（地歴科）から、内容上の質問や取り扱い方の疑問を提起され、こちらが反省し勉強する材料になったこともある。視野の拡大、扱う領域を自分から狭く限定しないことなど、自分自身の「研修課題」として考えてみてもよからうと思う。

3. 「外来思想」を扱う際の課題

日本で「外来思想」というと、ほとんどすべてではないか、といわれるかもしれない。だが、むしろそれゆえに、扱うときに注意しなければならないことがある。それは、日本で独自に展開した部分が、伝来したものの「オリジナル」とはかなりの程度に隔たったものになっていることが少なくないという点である。

たとえば、仏教だけを取ってみても、日本に伝来した仏教は中国を経由した大乘仏教であり、インドで誕生した仏教からは千年あまりを経て変容したものである。また、鎌倉新仏教と称される諸宗派の多くは、日本国内でほとんど独自に形成されたという特徴を持っている。つまり「同じ仏教である」としてこれらをひとくくりにして取り扱うことがはたして妥当なことかどうか、これはよく考える必要のある課題である。他の諸思想にも同様のことがいえるわけで、儒教などはそのことが明白に理解されうらと思う。

この点からすると、仏教および儒教、より詳しくいえば朱子学と陽明学については、その基礎的な理解をしっかりと形成しておくことも重要な課題になる。このことは「幕末維新」以来の西洋思想導入をふまえれば、西洋思想についてもいえる。もし、この前提部分の理解が不十分であれば、日本の思想を扱うとともに必要部分の補充をしなければならない。筆者の事情では、ここが不十分であることは自分の責任だから文句も言えない。とはいえ、歴史や時代との関係をこの文章でいささか強調したいことには、ここで述べたことながらも小さからぬ関係を持っているのである。

もう一点、2の(2)でふれた歴史との関連に関わることだが、たとえば日本と中国の交流・交易について、どのようなことを理解していればいいのだろうか。一例だが、奈良時代から平安時代については、遣隋使と遣唐使を考えれば交流史をおさえたことになるかに思える。ところで、遣唐使の廃止から「元寇」を経て勘合貿易に至るまでの間、日本は中国と交流を持っていたのだろうか。公式の外交としてはともかく、もし何の交流もなければ、栄西や道元は宋の国で禅を学んで帰ってくることはできなかったはずだ。歴史を学習することとの関連が、このようなどころにも現れてくる。こうしたことから、思想史の形態で授業を構成することにもいささかの意味があるのではないかと考えている。

4. 一つの具体例—奈良仏教と平安仏教の対比

奈良仏教は「南都六宗」と「鎮護国家」がキーワードになり、平安仏教といえば「山岳仏教」と「密教」それに「天台本覚思想」への展開、というあたりがポイントになる。ところで、奈良仏教から平安仏教への展開は、最澄と空海の唐留学と天台・真言両宗の招来、ということがメインになっていることは確かである。奈良仏教は、「鎮護国家」という用語のためもあって「国家仏教」との規定で語られ、さらに「国政への介入」を問題とした朝廷によって平安遷都の際置き去りにされた—ということになる。もちろん、この後半は日本史の授業で扱われる内容であろう。さて、この奈良仏教についていわれるところの「国家的統制」については、東大寺戒壇院の歴史的・社会的・政治的意義を扱うことで明白になる。そして、このことが理解されていると、平安仏教において比叡山延暦寺の大乘戒壇が持つ意義がどれほど大きなものかわかってくる。加えて、「南都六宗」の学問的性格は、

平安仏教両派の「救済」に向かう関心との比較において重要な要素であるし、平安時代以後に仏教が広がりを見せていくのはなぜかということ、仏教そのものの在り方から考える契機ともなる。ただ「このような主張がなされました」というだけで終わらせては、あまりにもったいない。現在でも「善男善女」が寺院詣でをする際に求めていることは、ここで扱われる内容と少なからぬ関係を持っているはずなのである。

ここで述べたことは、平成15年度に実施した内容に即している。古代日本の思想を、いわゆる「古神道」に相当する内容の後で仏教を中心に扱った際に上記のような内容を加えて構成した。また、天台宗が中国で興った宗派であることや、その根本経典が何かということまで扱ったので、その後鎌倉仏教を扱う際にも比叡山での修行が「鎌倉の祖師たち」に与えた影響を語ることに繋がっている。なお付け加えれば、こうした扱い方をするためには中国での歴史・思想の展開についても多少はふれる必要が出てくるが、ここには世界史との関連も生じてくることになる。余分なことのようと思われるかもしれないが、合わせてふれておくことで、思想の展開をより広い視野において理解することに役立ち、他の科目の学習にも効果が出る可能性がある。一例ではあるが今年度、受験のために日本史を選んだ生徒の中に、倫理の講座での学習が日本史の学習成果向上に寄与したと考えている生徒がいた。受験に関わらないところでも、「葬式仏教」と揶揄されたり、そもそもどういふことを説いているのかも知らないままで無用であるかのようにいわれたりする仏教について、少しでもきちんとした理解が形成されるように努力することは、宗教に対する無理解や誤解に由来する不当な評価や、偏見に基づく危険視・差別視などを回避し、解消していくことにも役立つはずである。

5. 授業中に起こったことー仏教をどう理解するか

これは数年前の事例である。日本に入ってきた仏教を扱うとき、さまざまな宗派を紹介することはもちろんだが、その宗派があがめる本尊や、中心において考える経典も内容として取り上げておくことが多い。その際に、ある生徒から質問が出た。「そもそも、どうして仏さんがたくさんいるんですか？」というのである。「お釈迦様」と他の仏たちとがどう違うのか、というのも、仏教の理解の上では重要なことには違いないが、実はそれまで説明の必要を意識していなかった。ところが上記のような質問が出たのだ。これを放置したままで先へ進むことはできなくなって、その時間は「仏」の定義や「三世仏」など、教科書や資料集を探しても見つかりそうもないことまで説明することになってしまった。ただ、大日如来は真言宗、阿弥陀仏は浄土信仰との関連でしばしば説明される。ここで出た問いは、そうした個々の仏の性格がどうこうというのではなく、何でさまざまな仏がいて、その仏たちはどのように理解したらいいのか、ということだった。仏教教理の奥深い

ところに入り込むことは無理だとしても、ある意味素朴だが難しい質問に対して、答える準備くらいはしておく必要がある。

仏教はブッダから始めて、大乘仏教の展開を扱い、その後日本仏教に移っていくのが通例であろう。そこには「悟り」に至る過程や「空」の思想、「慈悲」の問題などが並んでいるが、取り扱う事項は十分なものだといえるだろうか。それよりも、こちらが十分に説明することができるのだろうか。「世界三大宗教」と呼ばれているものについても、何をどれだけ理解して授業を行っているかを反省してみることは無駄ではない。西洋の思想についても、わかりきっていると思われること、通説として確定しているはずのことでさえ、改めて原典に当たってみると思いもよらない勘違いをしているかもしれない。

その昔、1時間の授業をするためには数時間の準備が必要である—といわれた。何時間だったか、言われたことを明瞭に記憶してはいないのだが、時間をかけて、かなりの深みまで自分でチェックしておくことが、授業を構成する上で大切なことであるという教訓であることは間違いない。いま、ここでこんなことにふれても「釈迦に説法」の類だろうが、釈迦自身が自らを省みることはどうだったのか、というところから考えてみるのも良いのではないだろうか。

6. 授業内容の修正と改善をはかるために

先に2の(2)で、「筆者自身の授業を見に来た同僚から、内容上の質問や取り扱い方の疑問を提起され、こちらが反省し勉強する材料になったこともある」と書いた。この件を少々説明する。

このとき授業で扱っていたのは、江戸時代の「民衆思想」に該当するところである。石田梅岩、安藤昌益、二宮尊徳を並べて、それぞれの思想を特徴的な部分に絞って説明した。梅岩は「商業の肯定と職業道徳」というように整理でき、昌益は「封建制に対する根本的な批判」、尊徳は「人間としての正しい生き方」のように、いささか極端ではあるが凝縮した。これに対して出された問いは、梅岩の「正直」について「国学でいうところの『清明心』との関係はどうなっているのか」というもので、付加的に「これ以前に国学についての学習はしているのか」とも問われた。この点について、確かに関連があるかどうかなどは説明していなかったのである。梅岩と国学の関連については改めて確認してみなければならないことだったが、時代を考えれば梅岩が国学の書物にふれていても何ら不思議はない。また、国学が「日本古来の精神」を探究したものであるならば、その内容と似たことが他の思想家に見られてもおかしいとはいえない。梅岩といえば「京都の商家」、心学は商業道徳に関わり、封建的身分制度については批判していない—このようにくくっておくことができる。だがその思想の背景に何があり、時代状況はどのようで、社会的影響は

……このように考えていくと、まだまだ数多くの観点から見ていくことができる。

さらに、こうしたことは昌益や尊徳にもあり得るだろう。尊徳はどこでどのように学問を身に付けたのか、ということは、伝説化した「薪を背負って本を読み」では説明できないだろう。昌益にしても東北の一医師だというのが、長崎遊学の経験があるという話もある。

(この件について、筆者は長崎港にある長崎遊学者の名を列記したモニュメントで、昌益の名を確認している。ただし文献的には確認していない。ノーマンの著書にはあるのかもしれないが。) このようなことまで詳細に調べなければならないとすれば大変なことではあるが、思想を生かすことを考えるならば一というのは、先人の思いを自らの行為に重ね合わせ、どのようなことであれ学びうることをくみ取り、行為と意思とを二つながら改善していくことにつなげようとするならば、おおよそのところでも確かめられる事実を確かめるくらいのことに労を惜しんではならないだろう。この節の表題には授業の「修正と改善」と掲げたが、間違ったことを述べていなくても、誤解を生む、あるいは不十分であると思われることについては修正が必要になる。そして授業の進め方、説明方法、内容の理解などに関して、いくらでも改善の余地はあるということになる。生徒の、というだけではない。むしろ教員の、こちら側のなすべき改善が問題になるはずだ。この改善を実行するためには、たぶん苦勞する以外に方法がない。生徒が鋭く「突っ込み」を入れてくれば、たぶん最高の契機となるのだろう。

7. 終わりに

高等学校の地歴科・公民科を対象とした学習指導要領実施状況調査もすでに行われて、来年にはその結果が公表されるとのことである。心配しているのは、まず倫理がどの程度高校で扱われているか。次に、倫理がある程度扱われていたとして、その内容についてどこの扱いが薄くなっているか、である。日本の思想は、扱いが薄くなっている可能性が最も高い部分ではないかと危ぶまれるところである。いくら近代思想が重要であるといっても、日本社会のなかでいまでも「礼儀」などさまざまな場面で、歴史的に形成され、受け入れられてきた（権力者によって強制されてきた、という言い方もあるが、それだけのことであれば強制が消え去ればたちどころにそれは消え去るはずではないか）ことは残っている。それらの来歴を、すくなくとも知っておくことは大切だし、できれば何を大事にするかを考えるために必要なことは理解されていた方が良い。西洋思想についても、それらがどのような基盤の上に形成されているかをまったく知ることなく、ただ「普遍性」のみをもって論じていては、思想のことばだけが上滑りすることを止められないだろう。生徒の頭の上をことばがむなしく通り過ぎていく、そんなことにならないように授業を工夫し、生徒の問いに対して応じることができるように自ら学ぶこと、そんな当たり前のことを、

改めて銘記したいものである。

思想史の形で取り扱うことができ、内容がある程度明らかであることについてはここまでである。ただ、本当に厳しいのは、思想として研究や論評がなされているものについてではなく、生徒が自分自身の「感覚」を通じて発してくる疑問にいかにか答えるかである。先哲の思想を示しても納得しない場合や、「そんなことを聞きたいのではない」と言ってくる場合さえある。これに答えられないと、やはり「倫理は役に立たない」と評価されてしまう。この最悪の評価を避けるには、どの思想が役立つか、などということではなく、さまざまに語られてきた所説をいかに自分のなかで理解し、示された課題に対して適切に対処する方策を導くことに活用するか、を考えなければならない。倫理学や誰か特定の思想家・哲学者についての専門家ではなく、「高校倫理の専門家」になることができれば、と思う。何がどれだけでできればそうなれるのか、それはどんな専門家なのか、誰か研究してみませんか？